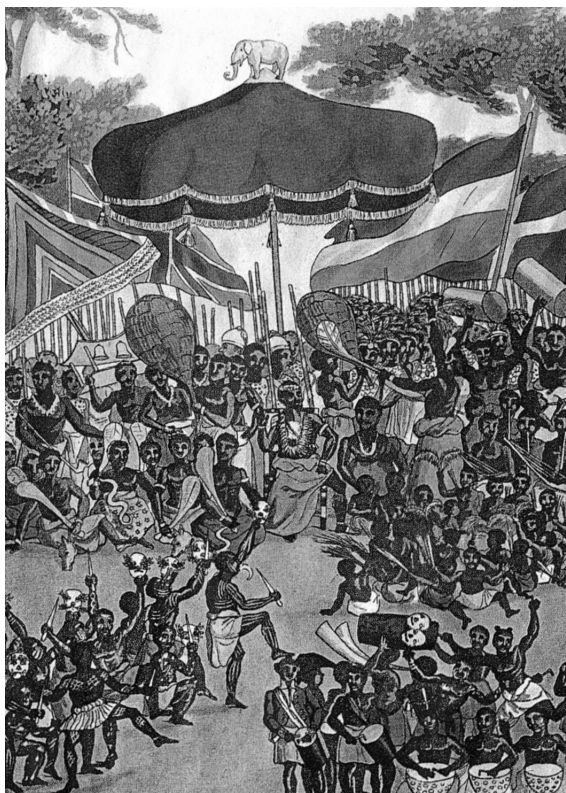


第 I 部

歷
史
編

第
1
章 王国の興隆と戦争の時代



1817年にイギリスの使節団が見たアサンテ王国の祭礼。中央にアサンテ王が座り、その頭上には、王の権力を象徴する象のシンボルを冠した傘が立てかけられている。背後には、当時のアサンテ王国と貿易関係のあったイギリス、オランダ、デンマークの国旗が見える。

1 初期の住人

「ガーナ」はいつから

現在の国名である「ガーナ」が採用されたのは、歴史的に見ればつい最近の一九五七年のことである。それ以前のイギリス植民地時代、ガーナは「ゴールドコースト」と呼ばれており、周辺地域との境界が明確に定められたのも二十世紀に入ってからである。イギリスによる植民地支配が確立する以前も、大西洋を経由して船で到達したヨーロッパ列強によって「ゴールドコースト」の名は使われていたが、主に沿岸部地域だけを指す言葉として使われていた。当時ヨーロッパ列強が入り込めなかった内陸部では、多くのアフリカ人王国が勢力争いを繰り返しており、明確な国境は定まっていなかった。以下では説明を容易にするために、現代ガーナの範囲を「ガーナ」として記述していくが、当時まだ「ガーナ」という地域は定まっていなかったことに注意していただきたい。

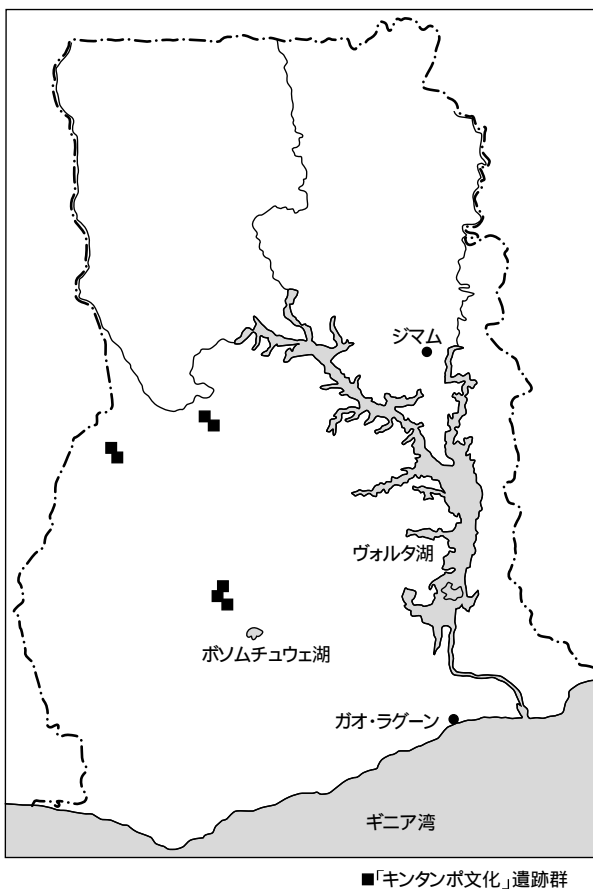
考古学調査の成果

では現在「ガーナ」と呼ばれている地域には、どれぐらい前から人が住んでいたのだろうか。ガーナ国内の最も古い人類の痕跡は、

ヴォルタ湖の北端に位置するジマムで発見された(図1)。この発見により、紀元前一万年頃にはこの地域にすでに人が居住していたことが明らかになった。また別の考古学的発掘により、紀元前八〇〇〇年前にはガーナ中部のボソムチュウエ湖付近にも居住者が存在したことがわかっている(コラム1)。

一方、現在の首都アクラの東に位置するガーナ南部の海岸地域ガオ・ラゲーンで発見された遺跡から、少なくとも紀元前四〇〇〇〜三〇〇〇年頃には狩猟採集を生業とする人々がこの地域に住んでいたことが確認されている。さらにガーナ中部および北部の各地では、「キンタンポ文化」とよばれる紀元前一〇〇〇〜一〇〇〇年ころの遺跡群が発見されている。この遺跡の研究によれば、当時この地域に住んでいた人々は雑穀やイモ類を栽培して農耕をおこない、また漁労・狩猟や家畜の飼育もおこなっていた。またキンタンポ文化の遺跡群は、森林地帯とサバンナ地帯の両方を含む広い範囲でも見つかっている。つまり人々は、異なる生態環境に柔軟に適応して生活していたわけである。さらにこの遺跡群からは海産物も発見されており、この時代にすでに沿岸部と内陸部の人々の間に接触があった証拠となっている。

図1 紀元前の考古学的遺跡

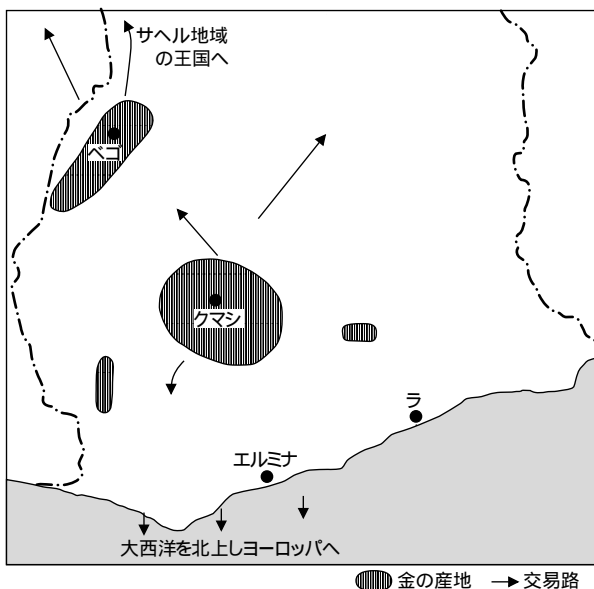


都市の発展

その後ガーナ南部に位置する森林地帯には、キンタンポ文化時代の人々の子孫であるアカンが居住するようになっていった（一般に「アカン」という語は、南部森林地帯に住む人々と彼らが使用する言語の両方を指すのに使われる）。さらに時代を経て十世紀頃になると、ガーナ南部の各地では金の採掘が開始され、これが大きなきっかけとなって他地域との交易が活発化した。

十一～十七世紀頃には南部森林地帯と北部サバンナ地帯のちょうど境目のあたりに交易都市ベゴが栄え、北のサヘル地域に栄えていた大国との交易の拠点となっていた（図2）。考古学者による発掘調査が明らかにしたところによれば、ベゴの内部にはいくつかの区画があり、王と地元民が住んでいた区域、北部からきたイスラム商人たちが住む商人街、鍛冶職人などがいた職工街などに分かれていたらしい。当時取り引きされていた主な商品は南部森林地帯でとれる金やコーラの実で、これらが北部サヘル地域から持ち込まれる岩塩、合金などと交換されていた。ベゴ近辺では手工業の特化も見られ、土器製作を専門におこなうエスニックグループなども現れていた。またベゴでは、農業労働などに従事させるための奴隷の取引もおこなわれ、主に北アフリカのアラブ世界向けに売られていたと考えられている。さらにベゴの遺跡からは、十六世紀に中国で作られた陶磁器も見えられて

図2 金の産地と交易路(11~17世紀頃)



おり、交易を通じて外部世界からさまざまな商品がこの地域に入ってきていたことがわかってい

十一〜十五世紀にかけてはベゴ以外にも多くの都市が南部森林地帯に栄え、また十三世紀頃になるとガーナ沿岸部にも都市が出現し始める。現在の首都アクラに位置するラなどはその典型で、沿岸部で産出する塩や魚を、中部森林地帯や北部サバンナ地帯で産出する農作物や綿製品と交易する拠点として繁栄した。

コラム 1

ボソムチュウエ湖

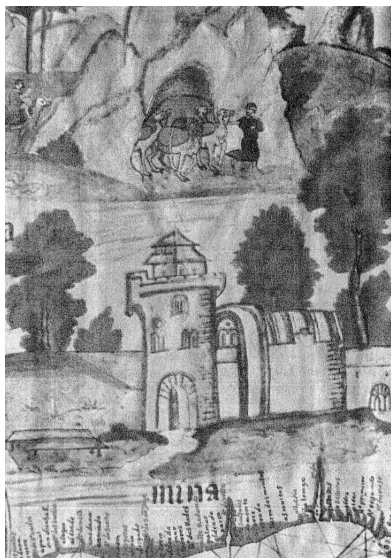
ガーナ中部にあるボソムチュウエ湖は、隕石の衝突によってできた直径八キロほどの大きな穴に水がたまってできた湖である。科学者たちによれば、隕石が衝突したのは約一〇万年前で、その直径は約五〇〇メートルであつたと推定されている。ボソムチュウエ湖の周囲は低い山になっているが、これは隕石衝突の衝撃で周囲が盛り上がったためと考えられている。この山々からは小川がいくつか湖に流れ込んでいるが、湖から流れ出る川は一本もない。それでも水位が一定なのは、湖水の自然蒸発か、あるいは湖底から地下への水の浸透によるものと考えられている。

地元では、ボソムチュウエ湖は神の住む神聖な場所として扱われており、ボート、カヌー、金属の針などを使った漁は、湖の神をいらだたせるものとして禁止されている。そのため地元の人々は、長い板のようなものを湖面に浮かべてその上につぶせになり、手で漕いで湖上に進んで網を投げ入れる、という独特の漁法をおこなっている。ボソムチュウエ湖には現在でも多くの珍しい魚が生息しているが、これは地元独特の漁法が魚の獲り過ぎを未然に防いでいるからだと言われている。

2 ヨーロッパ列強の到来

ポルトガル人の 到着とエルミナ

すでに十世紀頃からサヘル地域の王国に向けた内陸交易が活発化していたガーナだが、十五世紀後半に入ると大西洋を経由したヨーロッパとの直接的な交易が始まる。後にゴールドコーストと呼ばれるようになったガーナの沿岸地帯に最初に到着したのはポルトガル人で、一四七一年のことであった。彼らはこの地で産出する金を買集めるため、一四八二年に彼らがサン・ジョルジ・ダ・ミナ（「聖ジョルジ鉱山」の意）と呼んだ海岸に貿易の拠点となる砦を築き、毎年数百キロの金をヨーロッパに輸出した。サン・ジョルジ・ダ・ミナは後にエルミナと呼ばれ、彼らが築いたエルミナ城（砦）は現在も残っている（挿図1）。エルミナには内陸部各地から商人が訪れて取引をおこなない、そのなかには遠くマリ王国（現在のマリ近辺）から来た商人も含まれていた。当時すでに北部で栄えていた内陸交易都市ベゴと沿岸交易都市エルミナは、ゴールドコーストで採れる金の二大取引拠点となった。



挿図1 16世紀の地図に描かれたエルミナ城。エルミナ城の背後には内陸部の森林地帯が見える。さらに背後には、北のサヘル地域との交易をあらわすラクダの隊商が描かれている（Library of the Lisbon Academy of Sciences 所蔵）。

金と奴隷の交換

ポルトガル人がエルミナで金入手する際に交換していた商品は、布・金属商品・ビーズなどが中心であった。また他のアフリカ地域から輸入された多数の奴隷も、エルミナでの金との交換に使われていた。ポルトガル人はこれらの奴隷を、中西部アフリカ地域（現在のベナンやコンゴがある地域）から調達して海路でエルミナに送っており、その数は約一万人にも達していたと推定されている。輸入され

た奴隷は、ゴールドコーストでの金採掘に従事したほか、南部森林地帯での農業生産に必要な労働力として重要な役割を果たすようになっていった。後の時代にゴールドコーストから多くの奴隷が輸出

されたことは周知の事実であるが、大西洋交渉の初期の時代にガーナへの奴隷の輸入がおこなわれていたことはあまり知られていない。

青空マーケット

ヨーロッパ人が持ち込んださまざまな商品や外来の農作物は、ゴールドコースト各地で定期的に開かれる青空マーケットを通じて、国内に広く流通していった。当時の青空マーケットの様子を知るために、あるオランダ商人が一六〇〇年頃に書き残した記述を見てみよう。これは四〇〇年以上前に描写されたものだが、現代の青空マーケットの様子と共通するところがあつて、なかなか興味深い（挿図2）。

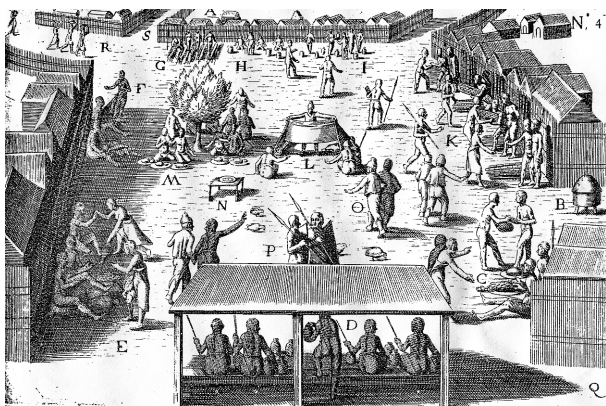
「どの町にも青空マーケットのたつ日があり、その日にはたくさんの商品が持ち込まれる。……朝のずいぶん早い時間から、人々はサトウキビの束を二つも三つも頭の上のせて現れ、マーケットに着くとそれを地面の上に広げ、地元の人々が二本三本と欲しいだけ買っていく。サトウキビが全部売れたかと思う頃には、今度は別の女性たちが現れ、オレンジ、レモン、バナナ、イモ、トウモロコシ、コメ、ニワトリ、卵、パンなど、沿岸部の住民やオランダ人船員の生活必需品を持ち込んでくる。他方、沿岸部の人々がマーケットに持ち込むものは、オランダ人から入手した布、ナイフ、鏡、腕輪、それに

男たちが漁で獲った魚などだ。……女たちは商売に長け、働き者である。彼女らは背中に子供を背負い、頭には果物などの重い荷物をのせ、マーケットまで少くとも五、六^{ルビ}は歩く。そしてマーケットで魚を買い込んだ彼女たちは、来たときと同じくらい重い荷物を頭にのせて家路につく。……女たちは七、八人がいっしょになって、にぎやかに唄ったりしながら、楽しそうにマーケットに向かう。……」。

ヨーロッパ列強と金交易

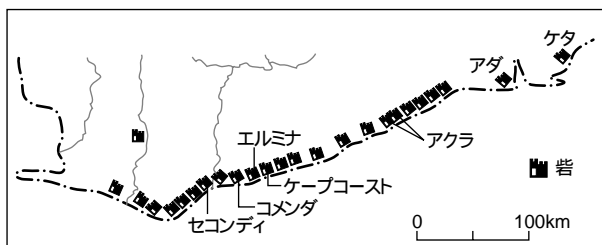
十六世紀に入ると、ポルト

ガルに続いてヨーロッパ各国がゴールドコーストでの交易を開始し、互いに競合す



挿図2 オランダ人商人が描いた、1600年頃の青空マーケットの様子。右上には地元でとれたサトウキビを売っている様子、中央にはヨーロッパから持ち込まれた布を売っている様子が描かれている。

図3 ヨーロッパ列強がゴールドコースト沿岸に築いた砦(城)



るようになる。オランダ、イギリス、スウェーデン、デンマークなどが次々にゴールドコーストの沿岸部に砦を築いて貿易の拠点とし、その数は最も多い時で二五にまで増加した(図3)。これらの砦は各国間の争奪の対象となり、ポルトガルが建造したエルミナ城も一六三七年にオランダによって奪取された。このような交易の拠点をめぐる争いは十八世紀前半頃には決着を見るようになり、次第にイギリスとオランダがゴールドコーストでの交易の実権を握るようになっていった。

これらヨーロッパ列強の当初の目的は、金の交易であった。しかし取引されていた金の産地がどこにあるのかはヨーロッパ人には秘密にされており、金の採掘とその流通は地元のアフリカ人の手によっておこなわれていた。ゴールドコーストに一四年間住んだオランダ人商人ボスマンは、一七〇四年に次のように記している。

「豊富な金を産出する二つの国（デンチラ、アカン、アチムの三国——引用者注）について述べてきたわけですが、他にも金の産出国があります。アサンテ国は間違いなくその一つで、デンチラ国よりも多くの金を産出しているようですが、われわれはこの国のことをまだよく知りません。アサンテ国とデンチラ国の間にあるアダンシ国も金の産出地です。残念ながらわれわれがよく知らない金の産出国が、まだたくさんあるのは間違いないのです。……ヨーロッパにいる人の中には、ゴールドコーストの金鉱山がわれわれの手中にあり、われわれが奴隷を使って金を掘り出しているのだ、と考えている人が少なくないようです。実際には、われわれは金の産出地を見たこともなければ、そこに行くすべも知らないのです。黒人たちは金の産出地を神聖な場所と考えており、われわれがそこに近づくことを許さないので⁽²⁾」。

奴隷貿易と ケープコースト城

十七～十八世紀に入つて新大陸やカリブ海地域でのプランテーション経営がおこなわれるようになると、農場の労働者として使うための奴隷の輸出がゴールドコーストで活発化する。ヨーロッパ列強によつてゴールドコーストから輸出された奴隷の数は、十八世紀の一〇〇年間だけでも六八万人にのぼっていた。奴隷の調達も金と同じように地元のアフリカ人によつておこなわれ、

ヨーロッパ人が直接に奴隷捕獲に従事することはなかった。

エルミナの東に位置するケープコースト城は、ゴールドコーストからの奴隷の積出港となった場所のひとつである。ケープコースト城はヨーロッパ列強が交易の主導権を争っていた時代の一六五〇年代に、スウェーデンによって造られた。しかしその後はデンマーク、次いでオランダの手に落ち、最終的には一六六四年からイギリスの支配するところとなつて、以後二〇〇年あまりイギリスの拠点として利用された。この城は現在は博物館となつており、出航前の奴隷たちが収容されていた牢や、彼らがつながれていた鎖などが当時のまま残されている。現代ガーナの海岸沿いには、この他にもヨーロッパ列強たちが残した砦がいたるところに見られる。

3 王国の形成と抗争

戦争と交易

ヨーロッパ列強が次々に沿岸部に到着した十五〜十六世紀頃、ゴールドコースト内部ではすでに多くのエスニックグループが王国を形成して政治

的な基盤を固めていた。そして十七～十八世紀にかけては、これらの諸王国同士の勢力拡大抗争が活発化していた。

例えば十七世紀にゴールドコースト南部で強力な勢力を保ってヨーロッパ諸国との金の取引を牛耳っていたデンチラ国は、北から勢力を拡大してきたアサンテ王国との戦争に敗れて十八世紀初頭に弱体化した。またゴールドコースト南東部で勢力を拡大していたアクワム国は、アチム国をはじめとすると近隣のエスニツクグループと抗争を繰り返していた。一方北部ではマンプルシ人、ダゴンバ人、ナヌンバ人などの王国が十五世紀頃から形成されていた。十七世紀頃になると、有力な王国を築いたゴンジャ人が東に隣接するダゴンバ王国を侵略し、ダゴンバ王国はその首都をガーナ北東部のイエンディに移動せざるを得なくなつた。戦争が頻発していたこの時期、人々は敵からの攻撃の際に防衛が容易になるよう、山や丘の上に居住地を構えた。現在ガーナの各地で山の上に町や村が見られるのは、この時代のなごりである。

これら王国間の戦争は、大西洋交易にも影響を与えていた。金の産地を持つ王国で戦争が勃発した時期には、金採掘が停滞して金の輸出量も激減した。逆に戦争でとらえられた捕虜が奴隷として売却されたため、戦時には奴隷が豊富に輸出されたという。また当時

ヨーロッパ列強によって大量に持ち込まれた銃器が、国内の戦争や奴隷捕獲に威力を發揮していた。イギリスやオランダは金や奴隷の調達をスムーズにおこなうため、内陸部での交易に影響力をもっていた有力な王に物品を送るなどして、彼らとの良好な関係の構築に努めていた。

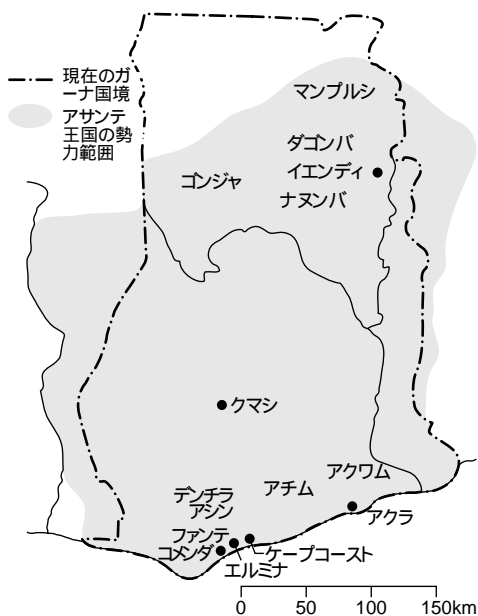
アサンテ王国の興隆

王国間の抗争が繰り返されるなか、十八世紀頃にゴールドコースト内陸部で急速に勢力を拡大してきたのが、アサンテ（英語読みはアシャンティ）王国である。アサンテ王国は、ゴールドコースト南部に栄えていたデンチラ、アクワム、アチムなどの王国を次々に支配下に置き、さらには北部のゴンジャやダゴンバの国をも属国にしてその影響力を拡大していった。十九世紀に入る頃には、アサンテ王国の勢力は現在のガーナ全体よりもさらに外の範囲におよぶまでになっていた（図4）。アサンテ王国は、属国となった周辺諸王国に金・奴隷・家畜などをおさめさせ、また戦時には兵力の供給を義務づけていた。しかしこれら属国を直接に統治することはせず、従前どおりの政治組織を維持させて、いわば間接統治の支配体制をしいていた。

黄金の椅子

このようなアサンテ王国興隆の基礎を築いたのが、十七世紀末にアサンテ王（アサンテヘネと呼ばれる）となったオセイⅡトウトウである。オセイⅡ

図4 19世紀初頭頃のアサンテ王国の勢力範囲



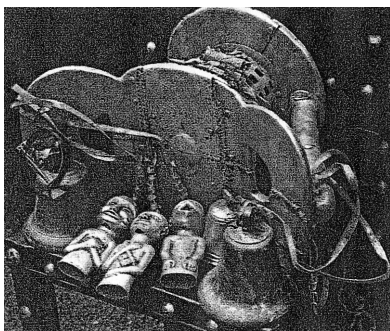
トウトウは近隣の首長たちとともにアサンテ連合王国を形成してその首都をクマシにおき、強力な軍隊を組織して近隣諸王国を支配下においていた。また彼のアドバイザーである伝統的司祭のアノチエは、アサンテ王国統一の象徴である「黄金の椅子」伝説の中心人物であった。この伝説によれば、アサンテ連合王国のリーダーたちが首都クマシで会合を開いてい

た際に、アノチエ司祭が黄金で飾られた椅子を天空から呼び寄せ、椅子は静かにオセイ||トウトウの膝元に降りたつた。そこでアノチエ司祭はその場にいた人々に対し、この黄金の椅子はアサンテ人の魂そのものであり、王国の力・富・繁栄全てがこの椅子の内にあるのだと説明したという。以来現在に至るまで、この「黄金の椅子」はアサンテ王国の象徴として首都クマシの王宮に保管されている（写真①）。

4 アサンテ王国とファンテ王国

ファンテ王国への侵攻

大西洋交易の拠点となっていたケープコーストなどの主要な港は、沿岸部に栄えていたファンテ王国の領地内にあった。当時



写真① アサンテ王国の象徴「黄金の椅子」

のアサンテ王国の軍事的脅威を恐れたファンテ王国は、大西洋交易で輸入されている銃器や鉄をアサンテ人に売却することを禁じていた。対してアサンテ王国側は、沿岸部を支配することによって交易路を確保し、金・奴隷・銃器の取引をみずからの手中に収めたい意向をもっていた。

アサンテ王国の軍は幾度かファンテ王国のすぐ近くまで迫ったことがあったものの、ファンテ王国を支配下にはいたっていなかった。しかし一八〇六年、ついにアサンテ王国の軍はファンテ王国に侵攻する。きっかけはアサンテ王国の属国であったアシン国の首長がアサンテ王国との戦闘に破れ、ファンテ王国に逃れてきたことだった。アサンテ王はこのアシン首長の引き渡しを求める使節団を派遣したが、ファンテ王国がこの要求を拒否して使節団を殺害したため、アサンテ王は自ら軍を率いてファンテ王国へ侵攻した。

ファンテ王国領内のケーブコースト城を貿易の拠点としていたイギリスは、当初ファンテ王国を支持していた。しかしアサンテ軍がケーブコーストにまで侵攻してきたのを見た当時の総督は方針を変え、保護を求めてケーブコースト城に逃げ込んでいたアシン首長をアサンテ王に引き渡した。総督からアシン首長の引き渡しを受けたアサンテ王は後年、こう語っている。

「この時から私はイギリスを友人と認めた。なぜなら彼らの目的は交易であり、人々のことには関心がないことがわかったからだ。」⁽³⁾

そしてアサンテ王はこの戦争の捕虜約二〇〇〇人を総督と山分けし、総督はこれを奴隷としてケープコースト城から輸出した。イギリス総督は、ゴールドコースト内部の抗争に積極的に加担するよりも、交易からの利益を得るほうを選択したのである。いったん軍を撤回したアサンテ王国は、その後二度にわたってファンテ王国に侵攻し、以後ファンテ王国はアサンテ王国の属国に甘んじることとなった。

5 イギリスとアサンテ王国

奴隷貿易の廃止

一八〇二年にデンマークが奴隷貿易を廃止したの続き、イギリスとアメリカも一八〇八年から奴隷の取引を違法と定めた。これにより過去三〇〇年以上にわたって重要な「商品」であった奴隷の取引は下火になり、以後は椰子油などの農作物がゴールドコーストからの輸出品の中心となっていくことになる。また

ゴールドコースト内陸部ではアサンテ王国がほぼ全土を支配し、交易に関しても大きな影響力を持つようになっていた。奴隷貿易の廃止とアサンテ王国の興隆という二つの変化を背景に、十九世紀のゴールドコーストの政治経済地図は大きく塗り替えられていくことになる。

アサンテ王国への使節

奴隷貿易の廃止とともに大西洋貿易が新たな局面を迎え、同時に交易におけるアサンテ王国の影響力を無視できなくなったイギリスは、一八一七年にアサンテ王国に使節を送って平和協定を締結した。王国の首都クマシでアサンテ王に謁見した使節団のひとりには、この時のアサンテ王との謁見の様子を次のように記録している。

「われわれが一人ずつ進み出て王と握手を交わした数分の間、私は王の容姿全体を観察することができた。私の注意をまず引きつけたのは、王の立ち振舞である。われわれは原住民の王のいかめしさを「野蛮」と表現しがちだが、それはばかげた偏見である。アサンテ王の立ち振舞は威厳に満ちており、かつ優雅であった。……

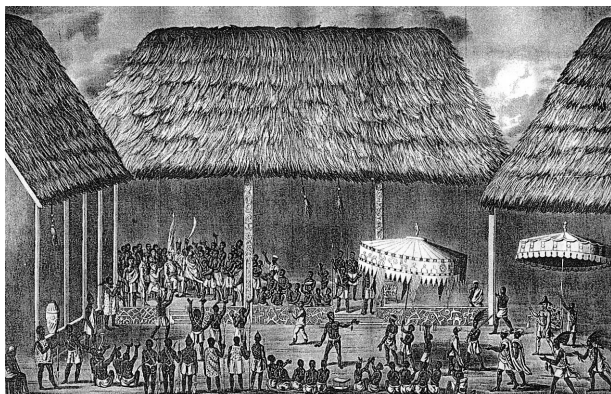
王は豪華に金で装飾された低い椅子に座していた。指の間には純金製のカスタネットのようなものがあり、出席者を静まらせる際にこれを鳴らした。背後にひかえた護衛の

者たちのベルトも純金製で、このベルトには金コーティングされた顎骨があしらわれている。……豪華な色の傘の下には、全体が純金で覆われた「黄金の椅子」が安置され、その周囲には太鼓や角笛が純金で分厚くコーティングされ飾られていた。……列席者たちの胸にも、星、三日月、椅子などの形をあしらった純金の装飾品が飾られていた⁽⁴⁾。

またこの使節団に饗された夕食には、金の皿と銀のナイフ、フォークが使われ、ポルトガル産ワインとオランダ産リキュールがそえられていたという。この時代のアサンテ王国の繁栄ぶりと、活発なヨーロッパとの交易のようすがうかがえるエピソードである。

協定をめぐる確執
この時にアサンテ王国とイギリスの間で合意された協定には、両国

間の交易を促進すること、沿岸部で活動するアサンテ人を保護すること、クマシにイギリスの代表部を開設することなどが記されていた。しかし協定締結の翌年、アサンテ王国の密使がファンテ王国のコメンダを訪問した際に、この密使は入国を拒まれ住民から暴行を受けた。アサンテ人の保護を定めたイギリスとの協定に基づき、この密使はケーブコースト総督に窮状を訴えたが、当時の総督はこの訴えに全く耳を貸さなかった。クマシに戻った密使から報告を受けたアサンテ王は、この事件の責任者の処罰を総督に求めたが、これも拒否された。総督のこれら一連の行動をアサンテ王国側は協定違



挿図3 1820年、イギリス王室から派遣された領事がアサンテ王国の首都クマシを訪問した。この絵は領事自らの手によるもので、アサンテ王国での歓迎の様子が描かれている。

反とみなし、イギリスに対する開戦を求める声も王宮内部で出はじめた。

イギリス王室派遣の領事

イギリスに対する不信感が

アサンテ王国の中で高まっていた一八一九年、クマシに領事館を開設するというイギリス王室の命を受けた領事がゴールドコーストに到着する。翌年この領事はクマシに赴き、新たな和平協定の締結のためアサンテ王と交渉した(挿図3)。アサンテ王はイギリス王室の領事を歓迎しつつも、ケーブコースト総督の協定違反に対しては次のように語って強い不信感をあらわにしていた。

「われわれの密使がコメンダに向かっ

たとき、ファンテ人たちは彼らを嘲笑し、うそつき呼ばわりし、暴行を加えて追い返した。密使たちがケープコースト総督にこの窮状を訴えたとき、総督はこれを聞こうとしなかった。私は総督に何度もメツセンジャーを送ったが、聞き入れられなかった。総督はファンテ人たちに防壁をつくらせ、ファンテ人がアサンテ王と戦うなら援助すると約束した。……私は白人が好きだから、心を痛めている。使節団を私によこして協定を締結させた総督が、なぜ今度は私と戦うために防壁を造っているのか？⁽⁵⁾」。

アサンテ王はさらに、イギリスが奴隷貿易を禁止したことについても、次のような不満を漏らしたという。

「以前のイギリスの王は今よりも交易を好み、たくさんの船をよこして、象牙、金、奴隷を買っていた。だが今では船の数も少なく、そのうえ金と象牙しか買わないという。……今になって（奴隷の売買が）悪いというが、それではなぜ以前はよかったのか？」⁽⁶⁾。

アサンテ王との交渉の末、イギリス王室派遣の領事は新たな平和協定の草稿を準備した。そして領事はこの協定をイギリス本国で正式に調印すべく、アサンテ王国の代表団とともにケープコーストに向かった。クマシを去る領事に対して、アサンテ王はこう語った。

「ファンテ人を信頼するな、とイギリスの王に伝えよ。白人たちと違って、われわれ

黒人の心は皆同じなわけではない。ファンテ人が私を嫌っていることを、イギリスの王はご存じないであろう。ファンテ人は信頼できない。彼らは私とイギリスの王を欺き、白人たちを欺くであろう。」

しかし「白人の心」も、皆同じなわけではなかった。この領事とケープコースト総督とは互いに仲が悪く、両者の間に協力関係は全くなかった。また領事が持ち帰った協定には、ケープコーストを含むファンテ王国がアサンテ王国の統治下にあることを認める一文が記されていたため、ケープコースト総督はこの協定に合意しなかった。さらに領事が帰国時に使用した英国海軍艦の艦長は、アサンテ王国の代表団と一緒に乗船させることを拒否した。領事は結局、アサンテ王国の代表団をケープコーストに残したままイギリスに帰国し、アサンテ王国との平和協定は批准されなまま終わった。アサンテ王は一〇カ月もの間、領事からの連絡を待ったが、事態に何の進展も見られなかったため、ケープコーストとの交易を禁止する布告をおこなった。これら一連のできごとにより、イギリスとアサンテ王国の関係はさらに悪化した。

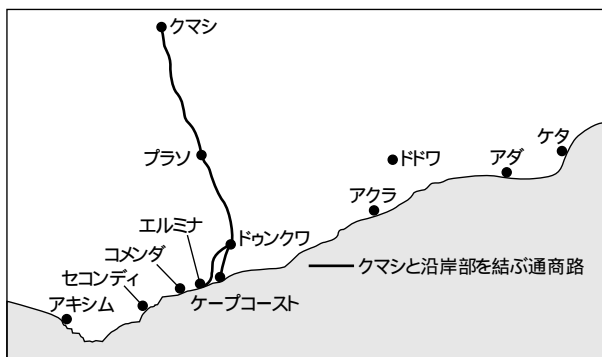
6 「森は大砲よりも強い」

ドドワの戦い

一八二一年から、イギリスとアサンテ王国の関係は急速に悪化し、戦争にまで発展する。そのきっかけは、イギリスに仕えていたファンテ人が、アサンテ人商人との口論の中でアサンテ王を侮辱する言葉を吐いたことだった。このファンテ人は数カ月後にアサンテ王国によって誘拐され、死刑に処せられた。当時の総督マツカーシーはこれを機にアサンテ王国との全面戦争を準備し、当時アサンテ王国の属国であった沿岸諸王国と共同して兵力の増強を図った。しかしマツカーシー総督自身は一八二四年、ゴールドコースト西部でアサンテ軍と遭遇し戦死する。

アサンテ軍は再び沿岸諸王国に侵攻し、一時は東部海岸のアクラにまで達した。しかし一八二六年、イギリスと沿岸諸王国の連合軍は、アクラの北に位置するドドワ近辺のカタマンソでのアサンテ軍との戦闘に勝利する（図5）。「ドドワの戦い」として歴史に刻まれたこの戦闘は、アサンテ王国の覇権がはじめて揺らいだ重要な戦闘であった。同時に、それまでゴールドコースト内部の政治に関わることがなかったイギリスが、軍事力を投入し

図5 沿岸部の砦(城)の位置と、アサンテ王国の首都クマシの位置関係



て直接介入した点でも歴史の大きな転換点であったといえる。その後一八三一年には、イギリス、アサンテ王国、沿岸諸王国の間で次のような平和条約が締結された。

「以下に署名するわれわれ伝統首長は、大英帝国の王との同盟のもと、以下の平和条約および諸王国間の自由貿易に同意し、これを批准する。……アサンテ王は、金六〇〇^{スオン}およびアサンテ王国の王族であるオセイ・アンサとオセイ・リンクアンタミサの男児二名を、今後の平和条約遂行の保証としてケープコースト城の総督のもとに預け、アサンテ王および上記の諸王間の和平をここに宣言する。供託された金、および人質の王族男子は、今後六年間ケープコースト城にとどめおかれるも

のとする。……」⁽⁸⁾。

イギリスと連合した沿岸諸王国は、この条約締結によりアサンテ王国支配からの解放を獲得した。そして以後しばらくの間、国内の覇権争いは小康状態となる。

イギリスの影響力拡大 「ドドワの戦い」以降、イギリスはさまざまな面でゴールドコースト沿岸部での影響力を強めていった。まず一八四四年、イギ

リスとゴールドコースト沿岸部の諸王国との間で、裁判に際してイギリスの介入を認める次のような合意が取り交わされた。

「……(われわれが遵守する)法の第一の目的は、個人とその財産の保護である。第二に人身御供、誘拐その他の野蛮な慣習は、法に反する忌むべき行為である。第三に殺人、窃盗その他の犯罪は、この国(沿岸諸王国)の慣習とイギリス法の原則を考慮しながら、イギリス裁判官および伝統首長の下で調査され裁判にかけられる」⁽⁹⁾。

この合意には、イギリスの司法原理をゴールドコーストの沿岸諸王国に初めてあてはめたという重要な意味があった。当時のゴールドコースト沿岸の諸王国は、政治的にはイギリスの統治を受けていなかった。しかしこの合意により、司法に関してはイギリスの影響力が各王国におよぶこととなったからである。

さらにイギリスは、ゴールドコースト沿岸部各地に築かれていた他国の砦を入手することによって、その影響力を地理的にも拡大していく。一八五〇年、それまでデンマークが支配していたアダ、ケタ、アクラのオスなどの砦はイギリスに売却され、これによりイギリスはゴールドコースト東部沿岸地域の砦の大部分を手中にした。またそれまでゴールドコースト総督のポストはシエラレオネ総督が兼務していたが、一八五〇年にはゴールドコーストに独立した総督と立法審議会が置かれ、行政面での強化もはかられた。

再びアサンテ王国とイギリスの対立

一時小康状態となっていたイギリスおよび沿岸諸王国とアサンテ王国との対立は、十九世紀後半に入って再燃する。きっかけは、ケープコースト城に逃げこんだ二人の逃亡者の引き渡しをアサンテ王が求めたのに対し、総督がこれを拒否したことであった。これを受けてアサンテ王は一八六三年に南部地域に軍隊を送り、イギリスと友好関係にあった沿岸諸王国に侵攻した。一方、イギリス側はアサンテ軍の侵攻に備えて内陸森林地帯のブラソに駐屯地を築き、そこに西インド諸島やシエラレオネからの援軍を派遣した。しかし援軍は熱帯雨林特有のマラリア、赤痢、黄熱病などの病気のために大きな打撃を受け、結局この駐屯地を放棄して沿岸部に撤退せざるをえなかった。「白人の墓場」と呼ばれていた当時の西アフリカで

は、イギリス人兵士は約一カ月しか生き延びることができないと言われ、西アフリカ遠征時には棺桶さえ持つていけば他に何も必要ないとまで言われていた（コラム2参照）。プラソからのイギリス軍撤退の報を聞いたアサンテ王は、次のように語ったという。

「白人は森の中に大砲を持ち込んだ。だが森は大砲より強い」⁽⁹⁾。

アサンテ王国は翌年の雨期の前には軍を撤収したが、この南部侵攻は、ケープコースト以東の沿岸の砦を支配するイギリスと沿岸諸王国に再び脅威を与えた。

オランダとエルミナ

アサンテ王国の強力な軍事力を支えていた銃器は、オランダが所有するエルミナ城を経由して輸入されていた。オランダはエルミナ城がある場所の地代を「地主」たるアサンテ王に毎年支払っており、アサンテ王国によるエルミナの支配権を容認していた。またエルミナの地元民はアサンテ王国と友好関係にあり、したがってアサンテ王国と敵対関係にあったファンテ王国など沿岸諸王国とエルミナの関係は友好的とはいえなかった。そして一八六八年、イギリスとオランダがそれぞれの砦の一部を交換する条約に合意し、イギリス所有であったコメンダの砦がオランダに譲渡されると、エルミナと周辺諸王国の間に抗争が勃発する。まずコメンダの住民は、砦のオランダへの譲渡を拒否してオランダの拠点であったエルミナを攻撃した。さらに他の沿

岸諸王国と共同でエルミナを包囲し、アサンテ王国とエルミナの間の通商路を封鎖したのである。

この抗争で交易上の打撃を受けたオランダは、自らが支配していたゴールドコースト西部の砦をイギリスに譲渡する交渉を開始する。そして一八七二年、オランダが所有していたエルミナ、セコンデイ、アキシムなどの砦はイギリスに譲渡され、ゴールドコースト沿岸部の砦は全てイギリスが支配することとなった。

熱帯病は酸素不足が原因？

コラム 2

当時のヨーロッパ人たちを苦しめた熱帯病は、現代でも存在する。特に蚊を媒介として感染するマラリアは、現代においてもワクチンが開発されておらず、蚊に刺されないようにするほかには有効な予防方法がない。そしてイギリスがゴールドコーストで勢力を拡大していた十九世紀には、蚊を媒介にしてマラリアに感染することすら知られていなかった。したがって当時の予防法、治療法には、現在から見ればまったく的はずれのものがあった。そのあたりの事情を、一八七三年に『ニューヨーク・ヘラルド』紙の特派員としてゴールドコースト入りした新聞記者

の記述から見てもよう。

「ヨーロッパ人が、アフリカでこんなにも病気にかかる原因は何か？これについての意見は分かれている。ある医者は水が原因であるといい、他の医者は水たまりから発散する毒が原因であるという。さらに別の学者は、新鮮な酸素の不足によつてマラリア菌が強まるのが原因だとする。十二時間のあいだ暑いベツトの中で過ごしたマラリア患者が、次の十二時間を新鮮な酸素が十分ある場所で過ごす、肺の中に吸引された十分な酸素が体内のマラリア菌を弱めることが証明されている。……私自身は、この最後の説が正しいと確信している。したがつて住居を探すときには、空気中の酸素の量を十分に考慮する必要がある。……」⁽¹⁾

7 「私に白人を攻撃する意志はない」

アサンテ軍の南進

アサンテ王国と友好関係にあつたオランダがゴールドコーストを去り、さらに沿岸諸王国が港への通商路を封鎖したことで、アサンテ

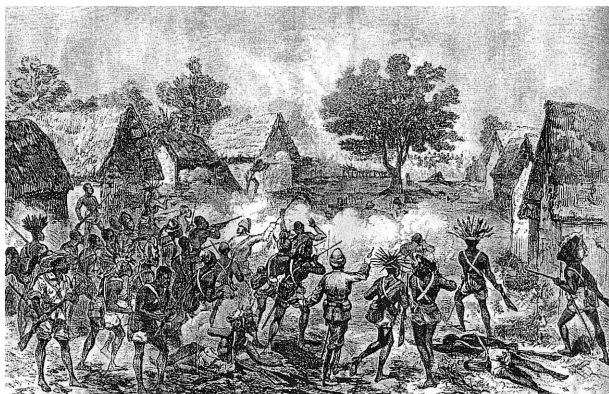
王国の交易は大きな打撃を受けた。アサンテ王国の王宮内では、この事態を打開すべく沿岸諸王国に軍事侵攻をおこなうべきとの意見が強まった。当時のアサンテ王コファイⅡカカリ（コラム3）はこの開戦に反対していたが、王宮内の好戦派の軍司令官たちはこの侵攻を強く要請した。結局アサンテ軍は一八七二年十二月に南部への侵攻を開始し、アマンクワティア司令官率いる軍隊が翌年に海岸地帯に近いドウンクワまで達し、イギリスの拠点があるケーブコーストやエルミナを脅かした。しかし雨期に入って軍内に病気が蔓延し、またイギリスが本格的な援軍をケーブコーストに派遣して対抗したことなどから、アサンテ軍は撤退を余儀なくされた。

イギリス軍の北進

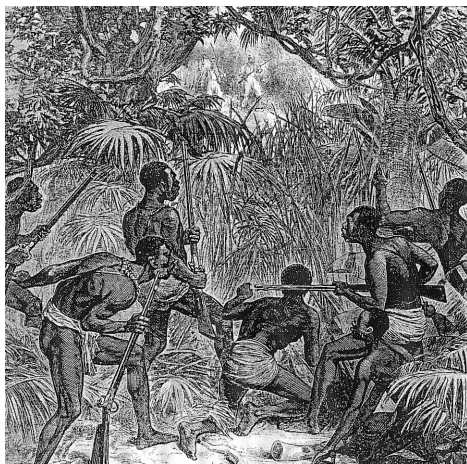
逆にイギリス軍は一八七四年一月、アサンテ王国への侵攻を開始する（挿図4、5）。この侵攻を指揮したのは、イギリスから派遣された司令官サーⅡガーネットⅡウォルズリーであった。ビルマ、クリミア半島、カナダなどでの戦闘経験が豊富なこの司令官は、数千人規模の地元労働者を使って前線基地があるブラソまでの進路を整備し、本格的な侵攻に備えた。

イギリス軍の接近を知ったアサンテ王宮内では、平和的解決か全面戦争かの議論が交わされていた。アサンテ王自身やイギリスから帰国したばかりの王族は平和的解決を主張し

イギリス軍によるアサンテ王国への侵攻には、イギリスやアメリカの従軍記者たちが同行し、そのように欧米に伝えた。



挿図4 イギリス軍率いるアフリカ人兵士たちがアサンテ王国の村を進軍しているところ。



挿図5 深い森の中でイギリス軍に奇襲攻撃をかけるために待ちかまえるアサンテ軍兵士。

たが、影響力のある軍司令官らは徹底抗戦を主張した。イギリス軍の侵攻経路にあたっていたアダンシ国の首長は、「アダンシ国の首長は私だ。私の許可なしに誰も私の国を通過させない」と発言してイギリス軍への抗戦を訴え、他の司令官たちもこれに同調した。これに対して、イギリス軍と交戦して軍を撤退せざるを得なかった経験を持つアマンクワテイア司令官は、戦闘経験のないアダンシ首長を次のように皮肉った。「戦争を見たこともない彼は、受けた傷跡を見せることもできないのだ」⁽¹²⁾。

イギリスとの和平を望んでいたアサンテ王は、自分が平和的解決を望んでいる旨の書簡をしたため、当時クマシに軟禁されていたドイツ人宣教師にこれを託してイギリス軍の前線基地に送った。アサンテ王はその後、同じく軟禁されていたスウェーデン人宣教師一家とフランス人商人も解放する。アサンテ王は次のように語って彼らを送り出した。

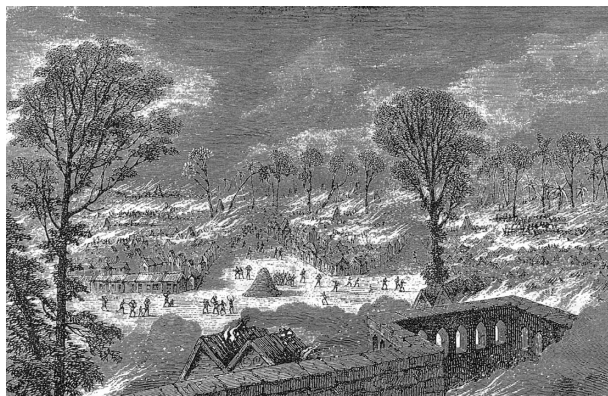
「わが良き友である総督に伝えてくれ。私は彼に軍を送ったのではなかったと。……私に白人を攻撃する意志はない。行って総督によく伝えてくれ。……私はできるだけのことはした。総督が侵攻を待ってくれないならば、私は事態を神にゆだねるしかない」⁽¹³⁾。

クマシ陥落

イギリス軍はその後アサンテ王国に侵攻し、近代的な武器装備に支えられて一八七四年二月に首都クマシに入城した。しかしそこにアサンテ王の姿

はなく、クマシ市民の多くもすでに避難した後であった。司令官はアサンテ王との交渉を要求したが、翌日になっても王は現れない。雨期の訪れによって帰路が絶たれることを恐れた司令官は、クマシにわずか二日とどまっただけで軍の撤収を決め、王宮を破壊し街に火を放つてアサンテ王国の首都を後にした（挿図6）。

イギリス軍が軍を撤収してケープコーストに向かっていた途上、アサンテ王はイギリスとの和平協定に合意する旨のメッセージをサーII ガーネット司令官にとどけた。この和平協定は、アサンテ王国側がイギリスへの賠償金として金五万^{スオン}を支払うこと、沿岸諸王国のアサンテ王国からの独立を認めアサンテ軍を撤退することなどを定めており、アサンテ王国側の敗北を認



挿図6 燃えるクマシの街

めるものであった。王国の首都クマシが侵攻されたこの戦争は、「サグレンティの戦い」としてアサンテ人に記憶されている。これは司令官サー||ガーネットの名が、地元で「サグレンティ」と呼ばれたためである。

アサンテ王コフィ||カカリ

コラム 3

一八六七年に即位したアサンテ王コフィ||カカリは、一八七四年のイギリス軍によるクマシ侵攻後、退位を余儀なくされた。当時のクマシに軟禁され、そこで四年間を過ごしていたドイツ人宣教師は、この王の印象を次のように書いている。

「彼の足は黄金のサンダルで飾られ、頭には豪華に装飾された飾り輪をつけている。衣装は黄色の絹の紋織りで、手足には黄金の装飾品が輝いている。……カカリは、実に印象的な人物だ。まだ若く、中背だが体格がよい。天然痘のあとが残る彼の顔は、力強いが同時に慈悲深い王であるという印象を人に与えている。全体の風貌から、この王が偉業をなすに十分な力を持った人物であることがわかる。……」。

別の機会にこのドイツ人宣教師一家は、王とその妻たちに謁見したことがあった。

その際、クマシ軟禁中に生まれた宣教師の娘、ロージも同席するよう求められたという。その時のアサンテ王は、また別の表情を見せている。

「アサンテ王とその妻たちは、わたしたちに会うのを喜んでいたようだ。特に小さなロージは、皆の注目を集めた。『この子は走れるのか?』とアサンテ王が聞く。妻がロージを床におろすと、ロージは王のところへまっすぐに走っていき、皆の心を和ませた。王は手を伸ばしてロージを引き寄せ、足間に彼女をおいて遊ばせた。自分が軟禁の身であることを知らないロージは、王のサンダルをじっと見つめていた」。

8 アサンテ王国最後の戦い

アサンテ王の拘束

一八七四年のクマシ侵攻の後、イギリスはアサンテ王国を除く南部沿岸地域を植民地と定め、一八七七年に植民地政府の首都をケープ

コーストからアクラに移動した。「サグレンティの戦い」で敗北したアサンテ王国は弱体化し、周辺の属国が相次いでアサンテ王国からの独立を宣言した。イギリスはこれら周辺諸国を支援することでアサンテ王国の影響力を弱める方策をとり、アサンテ王国に直接軍を送る介入はしばらくおこなわなかった。

しかし西アフリカにおけるフランスとの領土獲得競争が激化する十九世紀末になると、イギリスはアサンテ王国の軍事的支配を計画するようになる。同じ頃にアサンテ王国の北に位置する諸国と次々に協定を締結することに成功していたイギリスは、アサンテ王国を支配下に置くことによってイギリス領西アフリカに明確な領土基盤を築く必要があったからである。

アサンテ王国は平和交渉を幾度も申し入れたが、イギリスはこれを聞き入れず、一八九六年に再びクマシに侵攻する。アサンテ王国がフランスと交渉することでイギリスの領土確保に障害が出ることを恐れていたゴールドコースト総督は、この侵攻で当時のアサンテ王ブレンパー一世を拘束して、そのような交渉を不可能にする意志を固めていた。これに対してアサンテ王は対抗する軍を派遣せず、イギリス軍は抵抗を受けることなくクマシに入城した。アサンテ王との面会に臨んだ総督は、降伏してイギリスの統治下に入ることを

「サグレンティの戦い」以降未払いになっていく賠償金を即刻支払うことを要求した。これに対してアサンテ王は、王の象徴である黄金のサンダルをゆっくりと脱ぎ、黄金の飾り輪を頭からはずして、イギリスへの服従を示したという。

未払いの賠償金についてアサンテ王は、すでに準備してある六八〇スオンの金を即刻支払い、残りは分割して今後支払うことを総督に告げた。総督はこの返答に満足せず全額を即刻支払うことを再度求め、賠償金が全額支払われるまで王とその一族を拘束すると宣言した。アサンテ王は皮肉を込めてこう語った。

「食事の前に前菜をとると、食欲が増すのは良くあることだ。初回の金を受け取ると、総督はすぐにも残りの金が欲しくなる」⁽¹⁵⁾。

その後まもなくイギリスは、アサンテ王国がイギリスの保護領であると宣言する。拘束されたアサンテ王一族はエルミナを経由してシエラレオネに送られ（後にセイシエル諸島に移される）、長い亡命生活を余儀なくされた（写真②）。

ヤーリアサントワ戦争

イギリス軍によってアサンテ王は拘束され連れ去られたが、アサンテ王国の象徴である「黄金の椅子」は安全な場所に隠され無事であった。しかしその後イギリスはアサンテ王国の降伏を完全なものにするため、こ



写真② 1896年にイギリスによって拘束され、エルミナに送られたアサンテ王プレンペー一世（中央）とその一族。彼らは後にシエラレオネおよびセイシェル諸島に移送された。

の「黄金の椅子」を手中に収めようと本格的な搜索活動を開始し、これがアサンテ軍の蜂起を呼び起こした。

きっかけは、当時の総督ホジソンが一九〇〇年にクマシでおこなった演説であった。ホジソン総督はアサンテ連合王国の首長たちを前に、亡命生活をおくっているアサンテ王が王国の地に帰ることはなく、王国は永遠にイギリスの支配下に置かれると宣言した。さらに彼は「黄金の椅子」の提出を求め、ホジソン総督自身がその上に座ることを要求した。神聖な「黄金の椅子」に座ることを要求されたことは、アサンテ人にとってはそれ以上にならない重大な冒瀆であり屈辱であった。

ホジソン総督の演説の後すぐにアサンテ王国の首長たちは秘密の会合を持ち、そこでイギリスに対する開戦が決定された。この開戦を強く主張したのは、クマシ近隣のエジユス国の王母（クイーンマザー）であるヤー＝アサントワであった。息子がアサンテ王とともにイギリス軍によって捕らわれていたヤー＝アサントワは、首長たちとの会合の場でこう主張した。

「アサンテのリーダーたる貴男たちが、戦わずに腰抜けのように振舞うのであれば、貴男たちの衣を私の衣と交換しなさい」⁽¹⁶⁾。

そして彼女は首長の一人から銃を取り上げ、地に向けて発砲したという。後にヤー＝アサントワ戦争と呼ばれる、イギリスに対するアサンテ王国最後の戦いがこうして開始された。

アサンテ王国の軍はクマシにあるイギリスの砦を包囲し、ホジソン総督とその軍を砦内に閉じこめた。包囲されたイギリス軍は二カ月あまりにわたる籠城の後、ホジソンを含む一部の部隊を脱出させることに成功した。ホジソン総督らが籠城している間に、イギリス本国はゴールドコースト沿岸部に大規模な軍隊を集結させてクマシに向けて派兵し、クマシの周囲に配備されていたアサンテ軍と衝突した。

結局、近代兵器にまさるイギリス軍はアサンテの防衛軍を突破してクマシに入城し、皆に籠城していたイギリス兵たちを解放した。この戦争で死亡したイギリス軍兵士は二七二人、他方アサンテ軍兵士の死亡者は数千人と推測されている。戦争を指揮した王母ヤーⅡアサントワは捕らえられ、息子とアサンテ王が亡命生活を送っているセイシエルに送還された。この戦争後まもなくの一九〇二年にイギリスは、すでに植民地化していた沿岸部に加え、アサンテ王国および北部地域をイギリス植民地領に併合した。これにより、ゴールドコーストでのイギリスの植民地支配体制が確立したのである。

注 1) オランダ人貿易商マレス (P. de Marees) による記述 (一六〇二年)。Wolfson, Freda, *Pageant of Ghana*. London: Oxford University Press, 1958, pp.55-56 に再掲。

(2) Bosman, William, *A New and Accurate Description of Guinea*, 1705. (同右書 (pp.79-80) に再掲) オランダ語版は一七〇四年に出版されている。

(3) Ward, W. E. F., *A History of Ghana*, New York and London: Frederick A. Praeger, 1963 (1958), p.156.

- (4) Bowdich, T. E., *Mission from Cape Coast Castle to Ashantee*, 1819. (Wolfson, *Pageant...*, pp.103-104 ㄱㄷㄹ)
- (5) Dupuis, Joseph, *Journal of a Residence in Ashantee*, London: Frank Cass, 1966 (1824), pp. 130-131.
- (6) 回右書 (pp.162-163)°
- (7) 回右書 (p.169)°
- (8) 一九三一年四月二十七日付け協定(Newbury, C. W., *British Policy Towards West Africa: Select Documents 1786-1874*, Oxford: Clarendon Press, 1965, pp.293-294 ㄱㄷㄹ)°
- (9) Declaration of Fanti Chiefs (The 'Bond'), 6 March 1844. (回右書 (p.298) ㄱㄷㄹ)
- (10) Ward, W.E.F., *A History of Ghana*, New York and London: Frederick A. Praeger, 1963 (1958), p.219.
- (11) Stanley, Henry M., *Coomassie and Magdala: The Story of Two British Campaigns in Africa*, New York: Books for Libraries Press, 1971 (1874), p.36.
- (12) 回右書 (p.147)°
- (13) Edgerton, Robert B., *The Fall of the Asante Empire: The Hundred-Year War for Africa's Gold Coast*, New York: Free Press, 1995, pp.130-132.
- (14) Ramseyer, F. A. and J. Kuhne, *Four Years in Ashantee*, London: 1875. (Wolfson, *Pageant...*,

第1章 王国の興隆と戦争の時代

pp.155-158 (引用)

(15) Edgerton, *The Fall of...*, p.183.

(16) 回文書 (pp.191-192)。